様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７００２７

研究課題名（和文）生き方をめぐる現代倫理学の統合的研究

研究課題名（英文）An Integral Approach to the Contemporary Ethical Problem of the Way of Life

研究代表者
吉川　孝（Yoshikawa, Takashi）

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：２０４５３２１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究のプロジェクトは、研究成果として、生き方をめぐる古くからの哲学の問題に対して、現象学的なアプローチのいくつかの可能性を明らかにすることができた。現象学的倫理学は、人間の生き方を探求することのできる倫理学であって、その点において、現代倫理学の中では「徳倫理」や「ケアの倫理」と親近性を持っていることが明らかになった。このプロジェクトのなかで、多くの論文と２冊の著作を出版することができた。

研究成果の概要（英文）：This research project has found out some possibilities of the phenomenological approach to the philosophical problem of the way of life. The phenomenological ethics can search for the way of personal life and therefore is familiar with "virtue ethics" and " ethic of care". In this project a lot of papers and two books are published.

研究分野：哲学

キーワード：倫理学　現象学　生き方　行為　感情　価値

１．研究開始当初の背景

生き方は倫理学における古来のテーマであるが、現代の倫理学は、客観性や公平性を重視するあまり、生き方の問いから目を背ける傾向がある。カントの義務論、ベンサムやＪ・Ｓ・ミルの功利主義などの「近代道徳哲学」は、客観的に成立する道徳的判断の正当性を明らかにしたり、ある行為の善悪の公平な基準を設定したりしている。そうした流れを継承する現代の倫理学の主流派は、個人の固有の生を視野に収めたうえで、当人が生きるべき方向性を考慮することはない。現実の個別的な問題に寄り添おうとする応用倫理学も、公平性という観点から法や条例の制定を意図するものであり、個々人の生き方に目を向けるわけではない。

このような倫理学の傾向に対する批判が、1980 年代から生じてきている。公平性を重視する倫理学の全体を「正義の倫理」と見なし、正義からこぼれ落ちる親密な人間関係の重要性を指摘する「ケアの倫理」（メイヤロフ、ギリガン、ノディングス、キテイ）は、そのような流れを代表する動きと言えるだろう。さらには、古代のアリストテレス倫理学を再評価するかたちで、人間の人柄の善さに目を向ける「徳倫理学」（マッキンタイア、ハーストハウス、スロート）が注目を集めるようにもなっている。社会哲学の文脈では、「共同体論」（テイラー、ウォルツァー、サンデル）が、カント的義務論に依拠するロールズの正義論を、そこで想定される平等な権利主体の抽象性ゆえに批判している。20 世紀の後半に生じたこうした動向は、正義、公平性、客観性を重視する近代道徳哲学の視野の狭隘さを指摘しながら、個々人の固有の人生の具体性を視野にいれる点で共通している。しかし、ケアの倫理、徳倫理、共同体論は、それぞれ異なった文脈において成立しているゆえに、統一的に考察されることは少ない。これらを生き方という統一的なテーマから概観することは、ほとんど行われてこなかった。

２．研究の目的

古くからの倫理学の中心問題であった「生き方」について、現象学的倫理学の基本的立場を確認し、その意義を明らかにしながら、現代倫理学の議論を踏まえた上で、生き方について探究する倫理学の可能性を探る。

３．研究の方法

現代倫理学において、生き方の倫理学の系譜の全体を描きだす試みは、かなり広い射程をもった作業であり、本研究の枠内だけで実施することは困難である。そのため、研究の推進の観点に一定の制限を与えることにする。本研究では、現象学的倫理学の研究の成果を踏まえたうえで、英米系の倫理学・行為論と比較研究を行うという方法を採用する。これまでの研究成果を活用しながら、新たな知見を得ることができる。研究を進めるうえでの一定の基盤を確保することは、研究期間内において効率的に研究を進めることにつながる。

本研究は、倫理学の理論にかかわる文献研究として推進される。文献の購入や国内外の図書館での資料調査をおこない、資料を読解して、論文や研究発表を通じて成果を公表する。しかし、本研究は、一人の思想家の年代的発展や思想家のあいだの影響関係を文献的に示すことをめざすわけではない。むしろ、倫理学の学説が理論としてもっている可能性を、現代倫理学の議論のなかで明らかにしようとしている。現代において、生き方というテーマが倫理学の表舞台にはあがりにくい理由を踏まえたうえ

で、あえて生き方を探求する倫理学の可能性を議論の上で示すことを目標とする。

本研究は、生き方という論点を踏まえたうえで、現代倫理学を横断的に研究することを目指している。この研究においては、これまで取り組んで来た現象学的倫理学という大陸系の哲学と、英米系の生き方の倫理学とが統合的に研究される。現象学的倫理学は、人間の具体的経験に目を向け、豊富な記述的分析において成果を上げているが、倫理学の議論を避けている傾向がある。これに対して、現代の英米系の倫理学は、明確な理論というかたちで議論を構築しているものの、生き方という観点から人間を洞察する歴史の蓄積が十分にあるとは言えない。これらの特徴をふまえたうえで、双方から豊かな可能性を引き出すことが本研究の特徴である。

４．研究成果

2014 年度は、以下の成果を上げた。現象学的倫理学の立場からの生き方の倫理学の意義を検討する研究を進めることで、おもに次の３つの方向において成果をあげることができた。1.『ハイデガー・フォーラム』にて、フッサールとハイデガーの比較研究の成果を発表することができた。二人の哲学者のカントの哲学の受容の相違（フッサールは批判哲学を、ハイデガーは形而上学を重視すること）を指摘することで、生き方をめぐる現象学的倫理学のさまざまな可能性を明らかにする研究となった。2.『現象学年報』では、現代の英米系の行為論を踏まえたアクラシア問題を考察することができた。そこでは、アクラシア問題を問うことがなかった現象学的哲学の伝統が、自己統制型の主体には陥らない行為者の概念を確立していることが明らかになった。ヘアやデイヴィドソンなどの現代の英米哲学のアクラシア論の古典とは異なるアプローチの意義を示唆することができた。3.『心理学評論』には、ファッションという観点から生き方の問題を研究することができた。メルロ＝ポンティや鷲田清一の現象学的身体論の批判的検討を行ったうえで、ベンヤミンやジンメルなどの 20 世紀初頭の哲学を視野に入れることができた。ファストファッションの台頭する 21 世紀のファッション批評を視野に収めながら、従来の身体の哲学の限界を見定めたことは、今後の研究にとって大きな意味をもつことになる。今後は、ケアの哲学を中心とする研究をすることで、さらに研究の射程を広げることを目指すことになる。

2015 年度は、次の成果を上げた。生き方の倫理学の可能性を拡大する検討を行うことができた。とりわけ、現象学に関連する研究を深めることができたことには大きな意味があった。しかも、フッサール、ハイデガー、レヴィナスという現象学者のそれぞれについての研究成果を残すことができた。フッサール研究会では、フッサールの生活世界論の再読の試み(「新資料を読む」)を発表することができた。そこでは、世界で生きるという日常の実践の構造への分析の意義を検討した。『ハイデガー・フォーラム』の掲載論文「この世界を信仰すること」では、フッサールとハイデガーの比較研究をおこなった。双方の哲学の相違から、世界を生きることへの理解の相違を浮き彫りにすることができた。とりわけ、フッサールにおける実践理性の議論の可能性を検討して、信仰という要素の役割を明らかにすることができた。レヴィナス研究会では、『蘇るレヴィナス』(小手川正二郎著、水声社）への書評というかたちで、レヴィナスの倫理学の新たな可能性へのコメント(「レヴィナスが蘇るために」)をすることができた。応用倫理やケアの倫理などを視野に入

れた現代倫理学に対するレヴィナスの関係を確認する機会になった。フッサール、ハイデガー、レヴィナスの三者はいずれも、功利主義やカントの義務論などの近代道徳哲学が正面から扱うことのなかった生き方を正面からとりあげ、実践、世界、他者、信仰、ケアなどの問題を扱うことに成功している。

2016 年度は次の成果を上げた。いくつかの論文や共著において、生き方の倫理学を考察する成果を残すことができた。
とりわけ、動物倫理への取り組みについて、これまでにはなされていない現象学的アプローチの可能性を示すことができた。動物の心をめぐるアプローチは、動物とともに生きる人間の生き方の倫理学と結びつけることで、ブレンターノ、シェーラー、ハイデガーの現象学的アプローチの新たな読解の可能性を引き出した（「ブレンターノ、シェーラー　動物の心」『続　ハイデガー読本』、法政大学出版会、2016 年、所収）。
さらには、記録映画を参考にする取り組みなどは、本研究の範囲を拡大することにつながっている（ワークショップ「映画から考える生き方の倫理学」、2016 年、12 月、國學院大學）。記録映画作家の問題へのアプローチと応用倫理学のアプローチとを比較することで、双方にとって有意義な対話が成り立つことが明らかになっている。記録映画作家は、さまざまな問題に眼を向けながらも、問題を問題として描くだけではなく、そこにかかわる人々の生き方に目を向けることがある。このような問題への取り組みの姿勢は、倫理学者も学ぶべきことが多いだろう。今後、生き方の倫理学をめぐる研究を応用倫理学の問題へと転換することに道を拓くことになった。

しかし、出版予定の著作（共著）が刊行されなかったために、最終的な成果があきらかにならなかった。翌年度（2017 年度）に、『ワードマップ　現代現象学』（共著）を出版することができた。この著作は、現象学的哲学を一般の読者に向けて開設したものであるが、英米系を中心とする現代哲学の問題をめぐる議論を紹介するものでもある。ここでは、道徳や人生のトピックなどを設定しており、現代における生き方をめぐる哲学・倫理学の問いに対する現象学からのアプローチの可能性を示すことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 吉川孝、アクラシアの現象学 実践的合理性を再考する、現象学年報、無査読、30 巻、2014、21−30
② 吉川孝、ファストファッション時代の自己形成:河野論文へのコメント、心理学評論、 57(3)巻、心理学評論刊行会、2014、350−56
③ 吉川孝、「この世界を信仰すること――フッサールの理性批判の射程」、Heidegger-Forum、9 巻、ハイデガーフォーラム、2015、77−91
④ 吉川孝、フッセリアーナ第 39 巻『生活世界』を読む――確実性、根源的獲得、正常性をめぐって、フッサール研究、14 巻、184−200
⑤ 吉川孝，池田喬，小手川正二郎，品川哲彦「ワークショップ 現象学的倫理学に何ができるか?：応用倫理学への挑戦」、現象学年報、33 巻、2017、35-41

〔学会発表〕（計６件）

① 吉川孝、この世界を信仰すること――フッサールの理性批判の射程、ハイデガーフォーラム、 ハイデガーフォーラム、2014 年 9 月 21 日、東洋大学
② 吉川孝、レヴィナスが蘇るために、2015 年 8 月 7 日、京都大学

③　吉川孝、フッサールの新資料を読む(4):『生活世界』、フッサール研究会、2015 年 11 月 5 日、同志社大学

④　吉川孝、レヴィナス 経験の変様の倫理学、レヴィナス研究会、2016 年８月６日、岡山大学、

⑤　吉川孝、現象学的倫理学に何ができるか? 応用倫理学への挑戦、日本現象学会、公募ワークショップ、2016 年 11 月 25 日、高千穂大学

⑥　吉川孝、映画から考える生き方の倫理学、2016 年 12 月 10 日、國學院大學

〔図書〕（計２「件」

①　吉川孝、他、法政大学出版会、続・ハイデガー読本、2016

②　吉川孝、他、新曜社、ワードマップ 現代現象学 2017

６．研究組織

(1)研究代表者

吉川 孝（YOSHIKAWA, Takashi）高知県立大学・文化学部・准教授 研究者番号:20453219